

「兵籍簿」に見る父親たちの戦争

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝（10）

松岡 勲

はじめに

本誌第四〇号「ホロ島戦記（『敗残の記』の著者藤岡明義さんの残された資料（2）」の末尾で小学校時代の同級生のM次郎君と父親たちの戦死した状況を交流したことを報告しました。その後、ふたりで「父親たちの戦争」を調べ始めました。父親たちの「兵籍簿」を取り寄せ、父たちの戦死の詳細が分かってきました。今回は「五〇年代の遺児参拝」からさらに私たち戦争遺児たちの原点（父の戦死）にさかのぼります。最初はM次郎君の父のM一郎さん、そして私の父の松岡徳一の戦死の状況と続けて書いていきます。

〈M一郎さんの「兵籍簿」〉

M次郎君とは小学校の同窓会で再会していました。彼の父も戦死したことは知っていましたが、これまで父親の戦死と自身の生育史について話し合ったことがありませんでした。ところが、二年前の同窓会の時、私が父の戦死にこだわり、「一九五〇年代の靖国神社遺児参拝」について調べていることをみんなに話しまし

た。それがきっかけで、M君と「一度おたがいの父の戦死の状況について話をしよう」となりました。それで今年（二〇一六年）の四月に彼と会い、父の戦死の情報を交換し始めました。

彼の父のM一郎さんの戦死の状況については、「一九四五年八月一五日に朝鮮の『ラクダ山』で亡くなったことしか分からない」とのことでした。戦争末期の混乱のためにそう情報処理されたのかと思われました。「八月十五日に戦死してほんとうかな?」「もしそうだとしても、お父さんが亡くなったのは八月十五日の正午より前なのか、後なの



茨木小学校 1956年卒旧6年5組クラス写真男子2列目と3列目の間左端（松岡男子4列目右から2人目（M次郎）

か？」など疑問が湧いてきました。それで「靖国神社は戦死者の情報を持っているから、問い合わせたらどうか」と彼にすすめ、彼は靖国神社に戦死の情報を問い合わせました。しばらくしてその回答が送られて来ました。

靖国神社の「御祭神調査の件（回答）」

靖国神社からの「御祭神調査の件（回答）」には、M一郎さんの戦死について、「階級・陸軍伍長」「所属部隊・羅南師管区第四十四警備大隊」「死没年月日・昭和二十年八月十五日（戦死）」「死没場所・朝鮮威鏡北道清津北方駱駝山」「死没時御遺族・（妻）松枝」「合祀年月日・昭和三十三年十月十七日」とありました。

M一郎さんの生年是一九〇九（明治四十二）年で、私の父と同じ年で、戦没時の年齢も同じ三十五歳でした。

靖国神社に残る記録（国から提供された情報が元です）はこれだけでしたが、靖国神社が調べてくれた情報（国立公文書館アジア歴史資料センターのインターネット上の公開情報）が二点ありました。それは「所属部隊であった第一四四警備大隊の略歴」「同大隊の高稜山での戦闘細部状況報告」でした。後で私



清津の位置

がこの情報の確認とその他の情報を調べましたので、後述しますがM次郎さんの所属していた第四十四警備大隊は満州との国境に近い朝鮮（現在の朝鮮民主主義共和国）の清津（チョンジン）に配備されていました。この警備大隊は特設警備隊にあたり、日本陸軍が太平洋戦争中に日本本土の沿岸警備や軍事施設の損害復旧のために編成した部隊です。警備大隊は沖縄戦と樺太の戦い、ソビエト社会主義共和国連邦の満州侵攻で地上戦に参加しました。一九四五年八月九日のソ連の参戦後、南下してきたソ連軍と戦闘となり、部隊の大多数が戦死しました。死没場所とされた「駱駝山」については場所が分かりませんでした。本当にM一郎さんは八月一日に亡くなったのか、亡くなった場所はどこかなど疑問が次々と湧きました。さらに詳しく知るために、おたがいの父

親の「兵籍簿」を取り寄せることにしました。まず私が兵籍簿を取り寄せ、その上彼に取り寄せ方法を伝え、彼も兵籍簿を取り寄せました。

M一郎さんの「兵籍簿」には戦死までの記載がなかった

兵籍簿には入隊の時期から除隊（死没を含む）までの軍隊に所属していた経歴が記録されています。軍隊の戸籍のようなものです。陸軍の場合には本籍地所在の都道府県県庁（健康福祉部社会援護課）で閲覧ができます。海軍の場合は、厚生労働省の社会援護局（業務課調査資料室）が担当部署です。個人情報のため、閲覧は基本

的には遺族に限定されます。

M 一郎さんの兵籍簿を見ますと、四度召集されていて、四度目で亡くなっていました。三度目まで書き出すと、一度目は一九二九（昭和四）年十二月召集、一九三一（昭和六）年八月除隊、二度目は一九三七（昭和十二）年七月召集、同年十二月召集解除、三度目は一九四一（昭和十六）年八月召集、一九四二（昭和十七）年六月に召集解除です。いずれも派兵先は朝鮮（平壤）の歩兵第七十七聯隊でした。同じ部隊に三度とも召集されていたとは思いませんでした。M君のお父さんは、京阪神急行電鉄（現在の阪急電鉄）に勤務していたのですが、四度目の出征まで、席の温まる間もなく、朝鮮に派兵されたことになりました。こんなに頻繁に軍隊に取られたのですから、仕事や家庭は戦争に翻弄され、大変だっただろうと想像しました。

四度目の召集ですが、兵籍簿の履歴には「一九四五（昭和二十）年三



左：京阪神急行電鉄入社時のM一郎 右：初年兵当時のM一郎

月二日臨時召集ニ依リ大阪師管区歩兵第三補充隊ニ応召」と記述があるだけで、その後の記述が空白でした。これには大変驚きました。（後日、私とM君とで茨木市史編纂室に戦時中の軍隊に詳しい遠藤俊六さんを訪ね、兵籍簿について教えていただきましたが、「太平洋戦争末期の兵籍簿は戦時の混乱のため正確な記録が残っていない場合が多い」とのことでした。）

さらに驚いたのは、「戦死公報からの抜粋」の項で、M 一郎さんは「生死不明者」として扱われ、一九五七（昭和三二）年七月二〇日に戦死処理されていることでした。（戦死公報の内容は靖国神社の回答と同じです）戦後十二年間、M 一郎さんの生死は宙に浮いていたこととなります。

大戦末期の朝鮮北部（満州との国境地帯）の戦闘状況

大戦末期の朝鮮北部、満州との国境に近い清津では、一九四五年八月一三日に海側から上陸したソ連軍と戦闘が始まりました。一四日に上陸したソ連軍の主力及び南下のソ連軍戦車部隊との本格的戦闘にいたしました。M 一郎さんの所属した第四百四警備大隊は清津東方の高稜山の清津守備隊中であり、十五日にソ連軍の包囲を突破するため双燕山（場所は不明）方面に脱出しようとしたのですが、激しい戦闘となり多くの死傷者を出しました。そして八月十九日に停戦命令を受け、警備大隊は武装解除されました。ただ第四百四警備大隊は本部、第一、第三中隊に分かれており、M 一郎さんがどの部隊に属していたか不明であり、正確な動静は分からず、戦死の確認もできていません。（前記資料と防衛庁防衛研究所戦史室著『関東軍（2）／関特演・終戦時の対ソ戦』朝

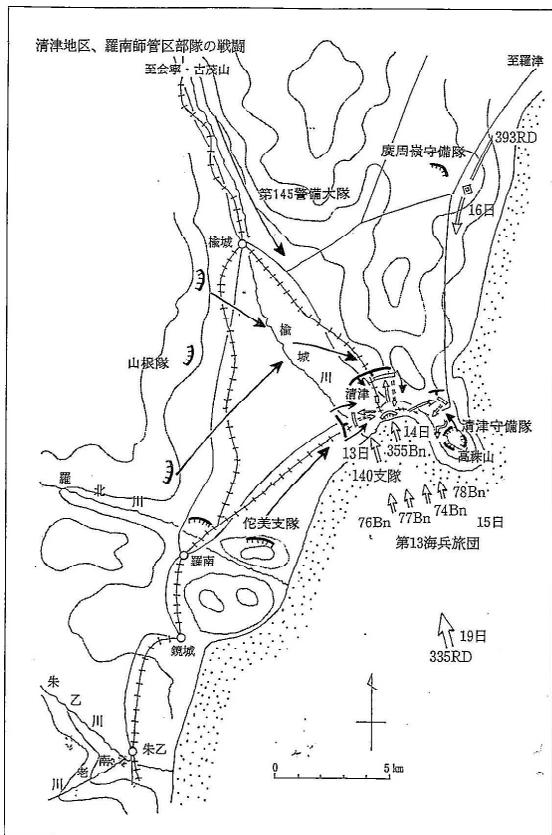
雲新聞社刊、中山隆志著『満州 1945・8・9ノソ連侵攻と日本軍』国書刊行会刊等を参照)

ところで、先に紹介した国立公文書館アジア歴史資料センターの公開情報によると、「死亡認定理由書」(一九五四年作成)がありました。この文書は第四百四十四警備大隊で生死不明者とされた隊員の「死亡認定理由書」です。その認定理由を次のように上げています。「昭和二十年八月十三日より同月十五日に亘る高稜山の戦闘に於いて本人は第一四四警備大隊第三中隊に所属し同戦闘に参加したる事実」を「戦場脱出帰還者である(個人名略)一六名が現認しているので開戦時本人が高稜山陣地に所在していたことは確実である。」「本人については昭和二十年八月十五日高稜山戦闘以後に於いて入ソまたは中共地域に残留等の生存を裏付ける資料は皆無である。」「これを理由として「本人は昭和二十年八月十五日に高稜山麓の戦闘に於いて戦死したものと認定する。」と判定されています。また先の「第一四四警備大隊の高稜山に於ける戦闘細部状況報告」(一九五五年八月三一日作成)も戦死認定の証拠として作成されたものでした。

また降伏後に生き残った人たちも「第一四四警備大隊の略歴」によると「入ソ」、すなわちソ連に抑留されたと出ています。M一郎さんが戦死したのか、ソ連に抑留されたのかは分からないのですが、戦後に家族に伝わった風聞では、行方の分からない「M一郎さんを神戸で見かけた」といううわさ話や、「M一郎さんは朝鮮での戦闘だけがをした」(ということは生きているかも知れない?)という元戦友の情報が伝わってきたとかがあったそうです。だからその可能性がまったくなかったとは言えないと思います。実際には朝鮮北部からシベリアに抑留された兵士は多かったです。

ようです。朝鮮北部に配備され、敗戦後にシベリアに二年間抑留された歩兵第七五連隊の兵士は次のように語ります。「最も思い出したくなかったシベリア抑留体験、ラーゲルの明け暮れは、まさに地獄絵さながらで、人は極限の状態におかれたとき『いかに生くべきか』を痛烈に教えてくれたと思っています。(中略)精神的、肉体的に与えられた苦難に満ちた屈辱的な経験を、帰国後の私たちの人生にどう生かすかが、帰還したものの宿題となったのではないかと思ってきました。」

戦後十年のこの時点で多数の数の生死不明者を「戦死」として処理されたものと思われまます。関連して一九五二(昭和二七)年八月一日に戦傷病戦没者遺族等援護法が施行され、その適用をするために生死不明者の戦死認定が進められたのではないかと思えます。さらに一九五三(昭和二八)年には未帰還者留守家族等援護法が制定され、未帰還者とその留守家族の援護、未帰還者の調



清津地区の戦闘
(中山隆志著『ソ連軍侵攻と日本軍』より)

査を国の責任で行うことになり、一九五九（昭和三四）年の未帰還者に関する特別措置法により、消息不明の未帰還者について戦時死亡宣告の審判等の措置が制度化されました。

また、米軍占領時に止まっていた戦没者の靖国神社合祀が再開され、この時期に大量の合祀が進んだことも連動するのではないかと思います。国はこの時期を「合祀推進年間」（一九五六年四月～一九五九年三月）とし、都道府県、靖国神社とタイアップして合祀を進めましたので、合祀者数は急増しました。敗戦直前の四五年四月までの祭神数は累計で約三万七千人でしたが、一九五六（昭和三一）年秋には一万二六〇九人、一九五七（昭和三二）年秋・冬では四七七一〇人、一九五八（昭和三三）年秋・冬で二万七五三六人を数え、累計の合死者数は一気に二一〇万九千人となりました。（田中伸尚著『靖国の戦後史』岩波新書）

M 一郎さんの戦死認定は一九五七（昭和三二）年七月二〇日、靖国神社合祀は一九五八（昭和三十三）年十月十七日です。私の父の松岡徳一の合祀は一九五七（昭和三二）年十月十七日で、一年違いです。翌年の一九五八年夏に私は中学三年生で靖国神社遺児集団参拝に行っています。M 一郎さんの合祀の翌年一九五四年はM 次郎君は高校一年生で、遺児参拝の対象ではありませんでした。彼は遺児参拝があったことさえ知りませんでした。

戦後、妻・M 松枝さんの苦難の人生が始まりました。女手ひとつで四人の子ども（女三人、男二人）でしたが、次女は早く亡くなっています（を必死になって育てられました。親戚の人が持つておられた農地を農地改革で手に入れ、農作物を作り、生活の糧としました。私の母が小作をしていた農地を農地改革で入手したのと同じです。彼と私は田植えや田の水の見回り、稲刈り等の農業

の手伝いをした共通体験があります。さらに松枝さんは精米所で働いて家族の収入を得ていました。日々の生活の思案に追われる毎日でした。それも私の母と同じです。松枝さんは一九八四（昭和五九）年六月に亡くなられました。七九歳でした。

M 次郎君は松枝さんへの思いを次のように語ります。

「毎年暮れには、おもちつきをよくしてくれました。サツマイモを蒸かしてよく食べさせてくれました。あんころ餅をよく作ってくれました。あの味を忘れません。田植えの時期に水回りの当番で夜によくついていかされました。靖国神社と一緒にきました。遺族会の役員の時、粗品の配りものを会員宅に配る手伝いをしました。・・・母親の生涯は苦勞の多い人生だったと思います。だから感謝の気持ちで一杯です。」

〈父・松岡徳一の「兵籍簿」〉

続いて私の父・松岡徳一の「兵籍簿」を見ていきます。父と戦争については、本誌三四号の「悲惨な戦場ホロ島、父の戦死と中国侵略」で書きました。父は二度召集されていますが、その二度目の召集の作戦である「大陸打通作戦」（京漢作戦と湘桂作戦）を調べて、日本軍の中国侵略について考えました。今回は一度目の召集を中心に「兵籍簿」を読んでいきます。

父の「兵籍簿」をはじめて読む

先の文章で父の二度目の召集について書いた時は、私の母・松

岡春枝が大切に残していた「死亡通知書（公報）」「現認報告書」等いくつかの書類をもとに、『戦史叢書 昭和二十年の支那派遣軍（1）』にあたり調べました。その時に一度目の召集の概略を知っていたのは、私の叔父（父の弟）に当時の父と叔父の「軍歴メモ」をもらっていたからです。今回、M次郎君と一緒に兵籍簿を取り寄せて、はじめて父の兵籍簿を見ました。まず父の第一回目の召集を見ていきます。

父は一九三七（昭和十二）年五月に動員され、輜重兵第四聯隊の兵站自動車第五十三中隊に配属されました。父は輜重兵でした。輜重兵とは兵站（作戦を行う部隊後方の軍事装備の調達、補給、整備、修理および人員・装備の輸送、管理運用についての軍事務務）を担当します。その自動車部隊でした。九月に大阪を出帆し、中国に向かいました。その記録を読んで行くと戦闘の連続であるのには驚きました。十月か



1 度目出征時の松岡徳一

実に四年間の長い軍隊生活でした。いかに後方支援の自動車部隊であったとは言え、中国侵略軍のまったただ中にいたことになりま。『戦史叢書 支那事变陸軍作戦（2）』によると、この時期の中国北部での戦争は、〈徐州会戦〉〈武漢攻略戦〉〈広東攻略戦〉が中軸だったとのことで、父はこの徐州、武漢の戦闘に参加していることになりま。父の所属する自動車部隊がどの作戦でどう関わったか同書で探しましたが、見つけれませんでした。）

父の出征した一九三七年は次のような時代でした。一九三一年の満州事变、一九三二年の満州国建国と進んだ日本の中国への侵略は、一九三七（昭和一二）年七月の盧溝橋事件を発端として中国北部（華北）地方へと拡大します。同年の八月の第二次上海事变勃発以後は中国中部（華中）地方へもさらに拡大し、次第に中国大陸全体に広がっていきます。宣戦布告なしの戦争が太平洋戦争が始まるまで続きます。一九三七年一二月に、日本

から十一月は太原攻略戦、十一月から十二月は宋哲元軍掃討戦（国民政府第二九軍宋哲元軍長）。一九三八（昭和十三）年になって、三月に河北戦、三月から四月は山西河南省での戦闘、五月から六月に徐州会戦、六月～七月は晋北戦、八月から十一月は武漢攻略戦。一九三九（昭和十四）年になって、四月に南昌攻略戦、四月から七月は襄東戦、八月から十月は潞安作戦。一九四〇（昭和一五）年になり、自動車二十七聯隊第三中隊に転属し、三月から六月は晋南作戦及び郷寧作戦、そして六月に帰国、七月に召集解除。

軍は当時の国民政府首都であった南京を占領し、軍人だけでなく市民の大量虐殺や強姦等を行い、国際的に批判されました。丁度日本軍が中国の植民地侵略を行ったこの時代に、父の所属する部隊は中国北部地域に攻撃を加えていたのです。兵籍簿を読むでは、南京事件と南京虐殺は、これに関する本を読んだり、講演を聞いたり、映画見たりしていたにも関わらず、どこか他人事のようにでした。父の所属していた部隊が南京を占領した部隊とは違っています、同じ時代、同じ空間で日本軍の兵卒として動いてい

たのですから、行われたことは同じです。父の兵籍簿を読んでいて、そのようなことに気がつきました。

父の二回目の召集は、一九四四（昭和十九）年一月に第五野戦補充工兵隊に配属され（工兵隊は大阪府高槻市にありました）、同年三月に中国に向かいました。五月に京漢作戦、五月から七月には湘桂作戦に参加しました。この作戦は中国全土を南北に縦断して占領しようとする大規模な作戦で、大陸打通作戦ともいいます。これは無謀で悲惨な作戦で大量の死傷者を出し、中国の人々を多く殺害しました。行軍する兵士は水を求め、飢餓に苦しみました。（本誌第三四号参照）父はこの作戦の終了後、一九四五（昭和二十）年一月二二日に武漢の近くの戦闘で亡くなりました。以上が父の兵籍簿に書かれていたことでした。

父と母の戦中の短い結婚生活を考える

父は二度戦争に取られ戦死しましたが、それを母の側から見れば、どうなるのか考えてみます。父と母との結婚、それに戦争はどう関わったのか、見てみます。戦前・戦中のわが家の時間経過を追って書きます。

一九三七（昭和一二）年 八月二五日 父動員下令
同月二八日 入営 陸軍工兵（輜重兵、兵站部自動車部隊）
九月二三日 中国上陸（北京、太原、漢口、徐州へ）

一九四〇（昭和一五）年 七月二〇日 父召集解除
一九四〇（昭和一五）年 一〇月 三日 結納目録が残っています。
（右に同じ）

一九四〇（昭和一五）年 一月 三日 結婚（結婚式の記念写真に「徳二三〇歳、春枝二三歳」とあります。数え年です。）

一九四二（昭和一七）年 二月二四日 兄弘和出生届入籍
一九四二（昭和一七）年 二月二四日 婚姻届同日入籍

一九四三（昭和一八）年 一月二八日 兄弘和病死
一九四四（昭和一九）年 一月一五日 父高槻工兵隊に二度目の応召

一九四四（昭和一九）年 三月一七日 私の誕生、父の出征（中国へ）

一九四五（昭和二〇）年 一月二二日 父の戦死

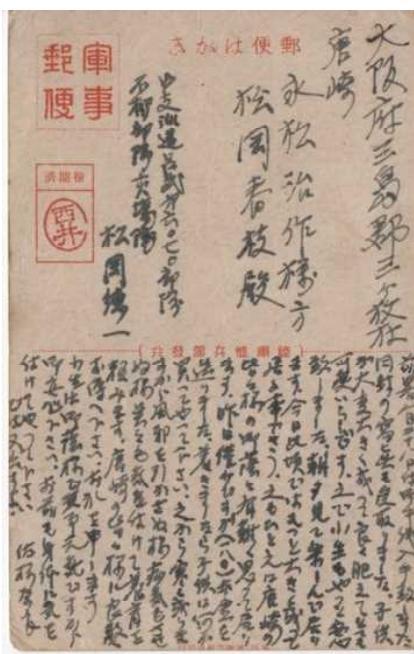
父の一回目の応召があり、召集解除後の一九四〇年十一月に結婚をあげ、ふたりは結婚生活に入りました。ところが母は兄の弘和が生まれた一九四二年暮れにやっと入籍されています。戦前の女性の置かれていた社会的位置をあらためて感じます。「子（男子）なきは去れ」の時代だったと思います。

その兄も戦時中の食糧事情の悪さから、一ヶ月ほど死亡しました。母からは黄痘だったと聞いています。母は月命日に（父の命日とあわせて）お坊さんにお参りに来てもらっていました。よく「今日は弘和ちゃんが亡くなった日なんや・・・」と言っています。

した。よほど辛かった記憶があったのでしよう。

ということとは父と母との結婚生活は四年間になります。そのうち一年間、父は中国の戦場にいますから、実際には三年間だけ一緒に暮らしたことになります。戦後、母は再婚せず、私を育ててくれました。私が幼い頃、母は父の夢をよく見ました。ラジオ放送で「尋ね人」の放送があり、そのニュースで「戦死したはずの人が興安丸で舞鶴港に着いた」などと放送があると、翌朝、かならず父が帰って来た夢を見るのでした。「お父さんが帰って来た夢を見た・・」と。夢で家の木戸を開けて、国民服姿の父が「ただいま帰ってきました」とあらわれるのです。しかし、それはかなわない夢でした。母が語る父の話を聞いて、私は大きくなりました。さまざまな母の語りから私は父のイメージを作り、戦争を拒絶する気持ちを育んできたと思います。九十歳で母がなくなつて間もなく十年になります。

葉書には、「写真を受け取りました。子供が大変大きくなって良く肥えてとても可愛らしいです。之で小生もやつと安心致しました」とある。



戦地から届いた父の軍事郵便

おわりに

これまで友人の父・M一郎さん、私の父・松岡徳一の兵籍簿を読み、父と戦争について考えてきましたが、最後にひとつ私の悔いについて触れておかなければなりません。それは私が大学を卒業し、私立学校（中高等部）で非常勤講師をしていた頃でした。まだわが家の墓は木の卒塔婆で石の墓ではありませんでした。それを見かねた叔母（父の妹）の夫（その方は沖繩戦の生き残りで、沖繩に慰霊碑を建てることに熱心でした）が「墓を作つてやる」と当時のお金で一〇万円出してくれることになりました。そこで叔父（父の弟）が墓石の碑文の校閲をすることになりました。私は父が戦争で「功績」を上げたとは書きたくはなく、「軍功」を上げたと言つて叔父に抵抗したのですが、抵抗しきれませんでした。わが家の墓石（一九六九年建立）の碑文には次のような文章が残っています。それは、京漢作戦に参加し「其の武功抜群により小隊長として転戦」したとし、父の戦死に関しては「率先陣頭に立ちて奮戦中敵弾を受け鬼神をも哭かしむ壮烈な戦死を遂ぐ」となっています。その頃、この碑文のある墓を「お金ができれば早く新しい墓石にしたい」と思っていました。今は墓石にある「加害の歴史」を残しておこうと思っています。戦争の危険性が迫る昨今となっていますので、わが家と戦争の歴史、その加害の歴史も私の子どもたちや知人に語り続けていきたいと思っています。

(二〇一六・一二・二四)

<兵籍簿（履歴部分）>

（資料）

M一郎

1) 昭和四年十二月十日現役兵トシテ歩兵第七十七聯隊江界第二中隊ニ入営○同日第九中隊ニ假編入○十二月二十二日朝鮮平安北道江界郡江界着○同日国境警備勤務ニ服ス

昭和五年三月二十六日第一期教育終了

昭和六年五月二十三日平壤帰還ノタメ朝鮮平安北道江界郡江界出發○同日ヨリ国境警備勤務ヲ離ル○五月二十四日平壤歩兵第七十七聯隊到着○五月二十五日第十一中隊編入替○八月二十日帰休除隊○十二月一日予備役

2) 昭和十二年七月二十八日師団動員下令○八月二日充員召集ノ為メ大阪歩兵第八聯隊ニ応召○八月六日整備完結○八月十六日大阪港出發○八月二十日釜山上陸○八月二十四日平壤到着○同日歩兵第七十七聯隊補充隊第二中隊編入○八月二十五日動員完結○十二月五日召集解除

3) 昭和十六年八月三日特臨編第三号ニ基リ臨時召集ニ依リ整備歩兵第七十七聯隊要員トシテ歩兵第八聯隊補充隊ニ入隊○八月六日編成完結○八月九日大阪港出發○八月十二日釜山港上陸○八月十三日釜山出發○八月十四日平壤着○八月十七日歩兵第七十七聯隊補充隊第四中隊編入

昭和十七年六月十一日昭和十五年陸支機密第二五四号ニ依リ召集解除

4) 昭和二十年三月二日臨時召集ニ依リ大阪師管区歩兵第三補充隊ニ応召（以下記述なし）

松岡徳一

1) 昭和十二年八月二十五日動員下令○同二十八日輜重兵第四聯隊ニ入隊○同月兵站自動車第五十三中隊ニ配属○八月三十日編成完結○九月十七日大阪出帆○九月二十三日塘沽上陸○九月二十八日天津着○自十月一日至十一月二十日北支那ニ於テ太原攻略戦参加○自十一月二十一日至十二月二十三日宋哲元軍掃討戦ニ参加○十二月二十四日ヨリ

昭和十三年三月十日河北殲定戦ニ参加○自三月十一日至四月三十日山西河南省ニ於テ占領地清戦参加○自五月一日至六月二十二日徐州会戦ニ参加○自六月二十三日至七月三十一日河南省ニ於テ晋北肅清戦ニ参加○自八月一日至十一月三十日武漢攻略戦参加○十二月一日ヨリ

昭和十四年四月十日進南昌攻略戦参加○自四月十一日至七月十二日襄東会戦参加○自七月十三日至八月二十五日晋東作戦参加○自八月二十六日至十月二十三日潞安周辺掃滅作戦ニ伴イ輸送業務○十月二十四日ヨリ

昭和十五年三月三十日進第四十一師団配属ニ伴フ輸送業務○同日軍令陸甲第一号ニ依リ自動車第二十七聯隊第三中隊ニ転属（定員外トシテ）○自三月三十一日至六月十三日春季晋南作戦及び晋南反撃作戦及郷寧作戦参加○六月十四日山西省洪洞発○六月十八日塘沽着○同二十一日塘沽出帆○同二十八日宇品上陸○同二十九日輜重兵第四聯隊留守隊着○七月二日召集解除

2) 昭和十九年一月十五日臨時召集ニ依リ工兵第四聯隊補充隊ニ応召○二月二十九日動員下令○三月十日動員●●（完結？）○同月十一日第五野戦補充隊工兵隊ニ転属○同日中隊附○同月十四日編成完結○同月二十二日門司港出帆○出帆ト同時ニ北支那方面ノ軍戦闘序列ニ入ル○同月二十四日青島上陸○同月三十日浦口到着○四月五日南京出帆○同月七日湖口通過第十一軍司令官指揮下ニ入ル○同月九日揚子上陸○同日二十三日揚子出發○同月二十四日河南省信陽着○五月十日支那方面軍（第十一軍）戦闘序列（指揮下）ヲ脱シ支那派遣軍（武漢防衛軍）ノ戦闘序列（指揮下）ニ入ル○自五月一日至五月十六日京漢作戦参加○五月十八日河南省信陽発○同日漢口着○同月二十二日漢口発○同月二十三日湖北省蒲折県●●●（羊要崗？）着○自五月十七日至七月十二日湖北省湘桂作戦第一期参加○七月二十四日支那派遣軍戦闘序列ヲ脱シ第三十四軍戦闘序列ニ入ル

昭和二十年一月二十二日鄂城県梁子島上陸戦闘ニ参加顛頂部左顎部穿透性貫通銃創（脳損傷）ニ依リ戦死ス（●字・判読不能）

<「兵籍簿」判読には茨木市史編纂室の遠藤俊六さんのお世話になりました。>